

チャイナ部隊研究

明海大学不動産学部講師 上地聡子

2022年度に科研費基盤Cに採択され、現在7名の研究メンバーで「チャイナ部隊」の研究を進めています。「チャイナ部隊」(米略称: Bosey)とは1946年後半から1949年にかけて沖縄島に駐留し、米軍の戦時余剰物資を運び出していた中華民国の労務者と憲兵隊に対する、地元沖縄の住民側の呼称です。2000年初頭まで一部の書籍や自治体史以外にまとまった記録がなかった「チャイナ部隊」ですが、米軍側資料や台湾にある中華民国側の資料、沖縄の自治体史の調査や聞き取りを通じてその全貌が徐々に明らかになってきています。

沖縄島の北部、伊江島に1948年5月から6月にかけて短期間滞在し、爆弾を搬出していた「チャイナ部隊」の活動についてまとめた資料紹介のスライドを一部、紹介します。2021年2月に琉球大学のオンラインシンポジウムで報告したのですが、2024年初頭に伊江島で開催する現地報告会のため、現在、改訂版を作成中です。

使用した米軍側の資料情報

【資料の所在】

沖縄県公文書館

資料群：米国収集資料 > 米国国立公文書館 > Archives II
(カレッジ・パーク) > RG554: 極東軍・連合軍最高司令官・国連軍総司令部文書

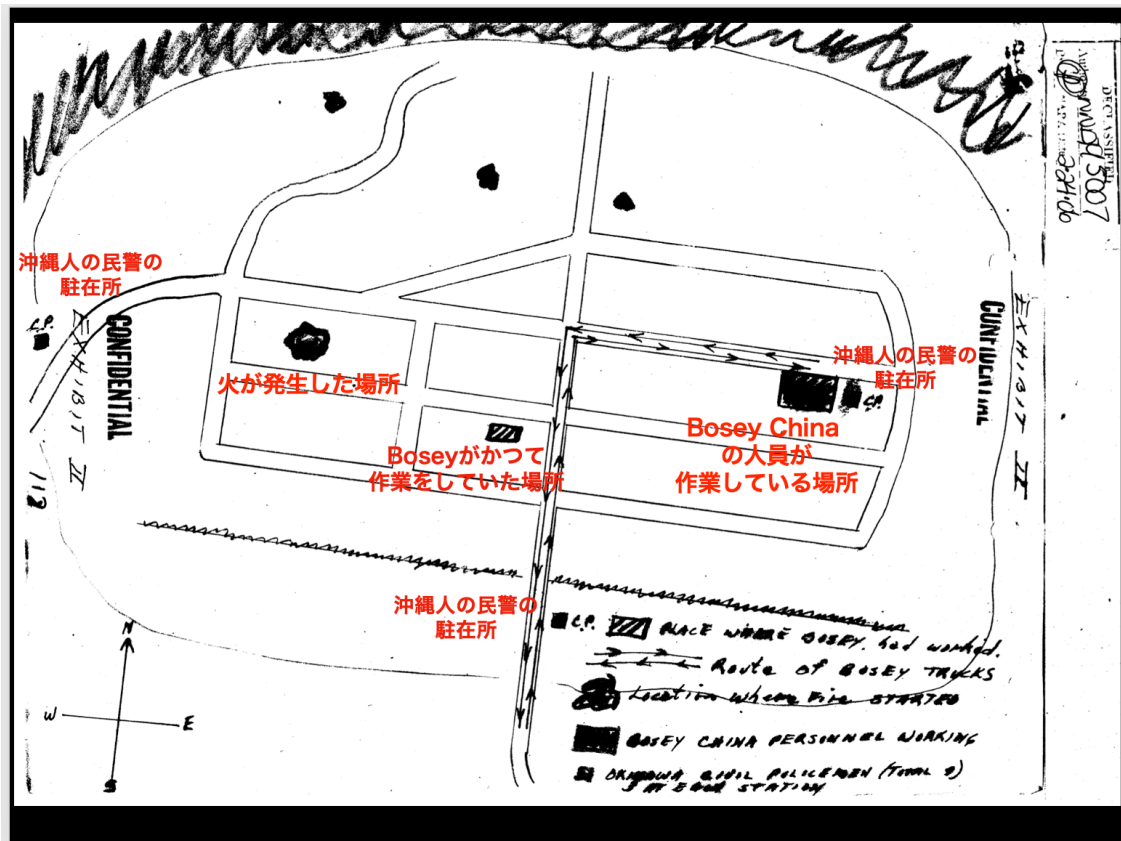
シリーズ：琉球軍高級副官一般書簡、1947～1956年

- ・ [伊江島米軍弾薬輸送船爆発事故関係資料 その1]
- ・ [伊江島米軍弾薬輸送船爆発事故関係資料 その2]: (原文タイトル 334K Explosion of LCT)
- ・ **[伊江島米軍爆弾集積所爆発事故関係資料]**

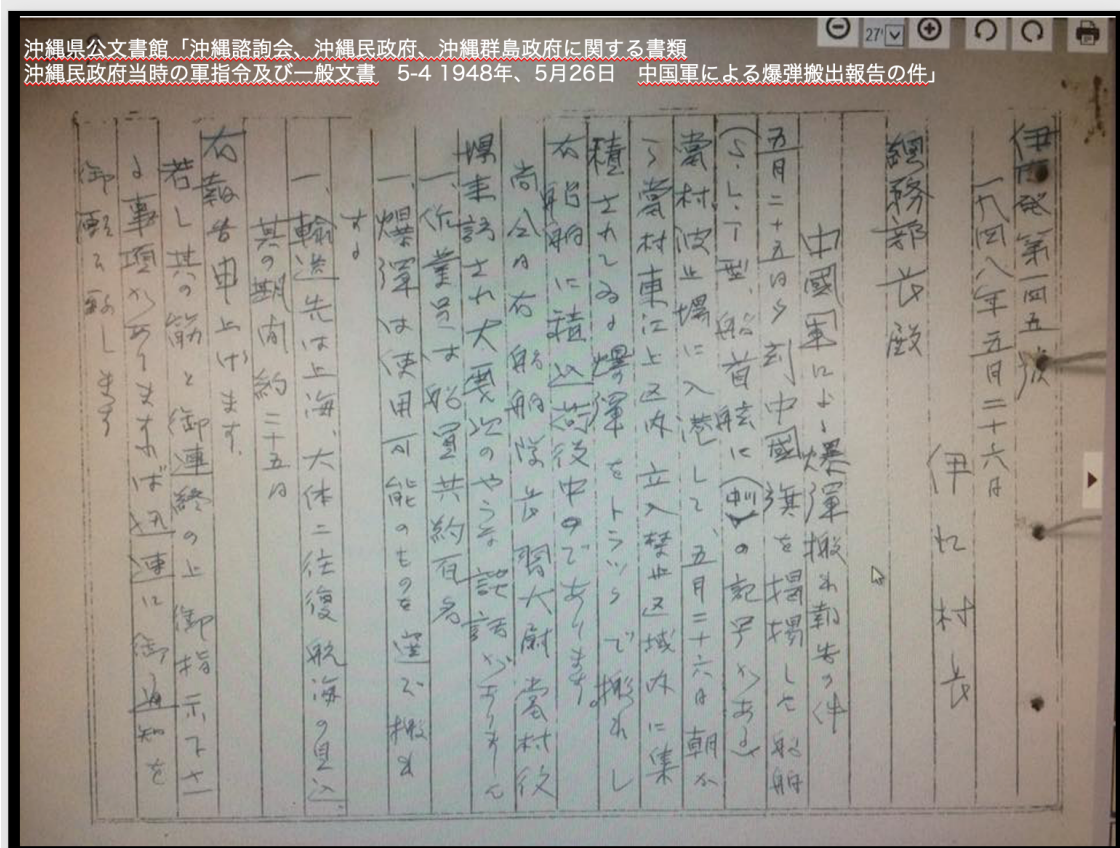
「チャイナ部隊」活動中に起こった大規模火災の現場写真



火災発生時のチャイナ部隊（Bosey）作業所見取り図



爆弾搬出について伊江村長が沖縄民政府へ提出した照会状（沖縄県立公文書館）



【伊江島におけるBosey活動の法的根拠】

- 少なくとも米国と中華民国（国民党軍）との間に武器供与に関する契約（contract）もしくは合意（agreement）を示唆する証言あり。

1948年7月2日第3回調査委員会（board meeting） Lt. Colonel Harvey Bower, 019912, Executive Officer, 226th Ordnance Base Dept.の証言の最中、室内の出席者が**機密（secret information）を扱う資格を有しているかどうかを確認**し、一人の速記者が一時退出させられ別の速記者と入れ替わったのちに、Lt. Col. Bowerは以下の証言をしている。

・我々は中華民国政府と、我々の余剰弾薬を譲渡するという契約を結んでいる（**We had contract with Chinese government to turn over certain ammunition that was surplus to our needs**）。火事のとて、中国人たちは弾薬を動かしている最中であつた。契約上は、そうした取扱いをすべて中国人がやることになっているが、口頭での合意によってそうした取扱は米国の弾薬検察官の監査のもとに行われることになっていた。

・FEAF（上地注：Far East Air Force／極東空軍？）により、**FLCを通じて中国人にかなりの量の弾薬を送るという合意（arrangement）**ができた。…（後略）

（史料一部欠落のため発言者不明。Monigfetti少佐がKronauer大尉？）

【終わりに】

- Boseyと地元住民の関係に「協調」と「反発」の二側面を見出す結論は平凡。他の地域でもこうした二面性は多かれ少なかれ見られる。
- しかし駐屯時期の短さ、運び出されていた物資の種類などは伊江島におけるBoseyの活動の独自性を特徴づけるものだと考える。
- これからも当時の資料から米軍、Bosey、沖縄、三者の証言の整理を進め、米国と中華民国間という外交文書から地元の聞き取り記録まで様々なレベルの調査で得られた知見とつなげていくと、細い事実の糸が網のように繋がり、戦後の伊江島史の断面をある程度の具体性を持って描くことにつながるのではないか。

上地ゼミの活動紹介

明海大学不動産学部講師 上地聡子

私が担当する「不動産学研究」（上地ゼミ）では、前期に日本の戦後復興に関する書籍を輪読し、後期は各人の興味関心に基づいたテーマを自由に決め、ゼミ論（8000字）の完成を目指しています。

2023年度の前期は松平誠『東京のヤミ市』（講談社学術文庫）について二人一組で2つの章を選び発表してもらいました。「ヤミ市を差配し敗戦直後の人々の生活を支えたテキ屋の親分と、戦後、疎開先から自分の土地に戻ってきて所有権を主張する地主」の立場に分かれてディスカッションを行ったり、ヤミ市が勃興した1940年代後半と本書が書かれた1990年代半ばの類似性を指摘する筆者の意見に賛成か否か、といったテーマについて活発に議論を交わしました。

後期は、「外国人が東京の観光スポットを訪問する理由」「米国ではなぜ中古物件が人気なのか」「都市計画法の伝播過程」といったテーマと問いをそれぞれが設定し、3回の中間報告を通じて1月までにゼミ論の完成を目指しています。

上地ゼミの授業様子と講義資料の一部を掲載します。

ディスカッションの下調べ（前期）



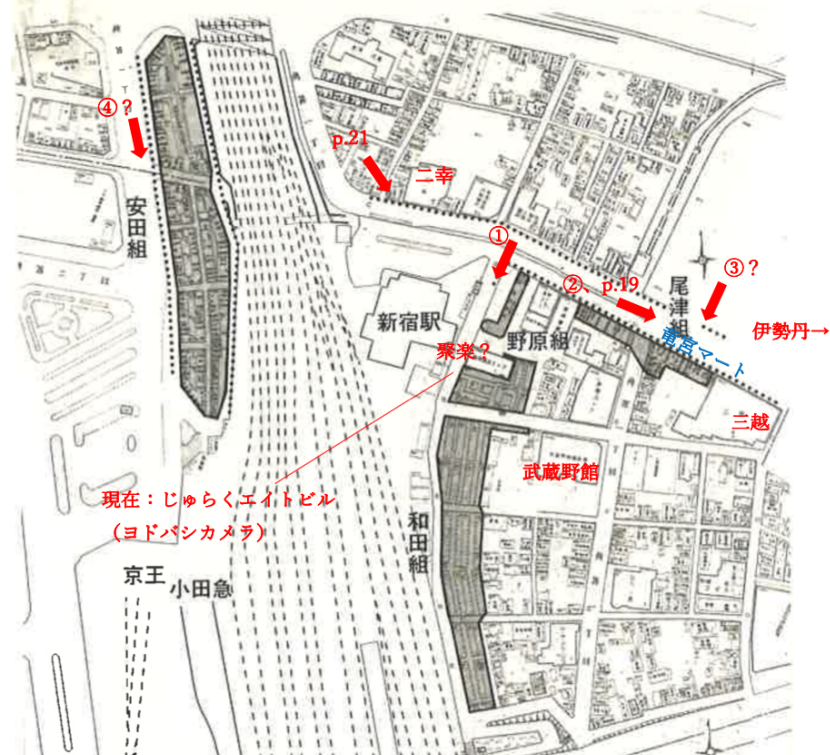
ゼミ論テーマ報告の様子（後期）



『東京のヤミ市』第1章の導入資料とレジュメ（上地作成）

2023.05.02 第4回 地図資料

新宿周辺のヤミ市：東口



(稲葉、青池 2017 : 35) * 石樽督和『戦後東京と闇市』鹿島出版会、2016 より孫引き



新宿大通商店街振興組合 HP より、戦前の聚楽

松平誠『東京のヤミ市』（1995=2019年）講談社。
「第一章 望遠レンズでみるヤミ市」②

上地 聡子

「第一章 望遠レンズでみるヤミ市」

新宿はヤミ市のターミナル (p.18)

・本章の視点→新宿を起点に山手線をぐるっと一周

・新宿=ヤミ市の発祥の地

→敗戦5日後、飯島一家小倉組二代目関東尾津組親分尾津喜之助が東口にヤミ市

・新宿がヤミ市を抱えた理由、盛り場になった背景

→JR中央線、私鉄小田急線、私鉄京王線沿いに形成されていた住宅地が戦後、さらに膨張 (p.20)。(空襲により都心の人が世田谷、練馬、杉並に移動)

→丸の内や霞ヶ関と、郊外住宅地の接続点 (p.21)

【鉄道駅とヤミ市が密接】

・鉄道駅=ヤミ市の供給基地としての役割。

→鉄道=供給の基本的な方法

→ヤミ物資の没収や検挙を避けるには下車してすぐ直接取引できる鉄道駅周辺が好都合

・1948年以降はブローカーによる大口取引、大量輸送、組織的な流通？

←実証的な研究が必要。

★ヤミ市の広告はいつ載ったのか？

→〈別紙資料①〉レファレンス協同データベースに寄せられた質問と解答から、尾津喜之助が8月18日に都内主要新聞に

転換工場並びに企業家に急告！平和産業の転換は勿論、其の出来上り製品は当方

自発の「適正価格」で大量引受けに応ず、希望者は見本及び工場原価見積書を持

参至急来談あれ 淀橋区角筈一の八五四(瓜生邸跡)新宿マーケット 関東尾津組

という広告を出したと複数の先行研究が述べているものの、事実ではないことが分かる。

★二幸 (p.20)：「山の幸、海の幸」にちなんで名付けられた総合食料品店。昭和6年には自動販売機を使った「オートマツト食堂」も誕生。(新宿大通商店街振興組合HP「昭和10年前後「爆発する新宿のエネルギー」」より)

★カสบ (p.20)：城塞に囲まれた居住地区。アラビア語の砦が語源。(デジタル大辞泉)